

2019年11月24日(日)／説教者：國分美生

説教：「彼女を記念して」—世界バプテスト祈禱月間(OBC 女性会)—

聖書：マルコによる福音書14:3～9

イエスはベタニヤのシモン家で食事をしていました。そこに一人の女性がナルドの香油を持って現れます。男性ばかりが集う食事の場に女性が一人で入ってきて、しかも食事の最中に頭に香油を注ぐということ…当時の習慣からは考えられない行動です。居合わせた人々は「何のためにこの香油を無駄遣いしたのか」と女性を責めます。しかしイエスは、彼女は自分に良いことをしてくれた…と言い、彼女の行為に賛同することで人々の非難を退けました。

彼女は「ローマの支配下にあるユダヤ人が構成する父権制社会に生きる 女性」でした。社会の習慣・文化・常識が男女弟子双方のメシア像に大きな 違いを生み出していました。男であるということで指導的な立場にあった弟子たちは、イエスが示す苦難のメシア像を理解できませんでした。ガリラヤから エルサレムまで付き従ってきた女性たちは、イエスのメシアとしての働きは 支配と王的栄光にあるのではなく「奉仕」だと気付いていました。それはその時代、男性の支配する社会の底辺で生きることしかできなかった彼女たちの体験から生まれたメシア理解だったのでしょう。

頭に油を注ぐ、という行為は旧約聖書で預言者がユダヤの王を指名する 時の行為です。女性は預言者の行う象徴行為でもってイエスを救い主と証しました。彼女の行為は当時の社会の中で、政治的には非常に危険な行動でした。民衆から絶大な支持を得ていたイエスに対して殺害計画がなされていました。イエスご自身も命の危険が迫っていることを感じとっていたはずですが、彼女がもし、イエスの死を予感できていたとしたら、それはイエスと共に生きていたからです。イエスは共同体から軽んじられていたり、見下されたり、差別的に扱われていた人々と共にありました。彼女もイエスを信頼しました。そして 彼女は人々の前でイエスが救い主であると大胆に証しました。彼女にとって、この香油は無駄遣いではなかったのです。

「世界中どこでも、福音が宣べ伝えられるところでは、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう」とイエスはいいます。

歴史的背景も含めて女性の視点から聖書を読むということは、人間が作り上げてしまった力の支配に対する抵抗であり、すべての人々を解放へといざなう行動です。これまで失われてきた視点、切り捨てられてきた者たちの視点から、より豊かに聖書を読み解いていきましょう。(国分美生)